

八王子市市史編さん室だより

稲 荷 山 通 信

第 10 号

発行日:2012(平成24)年9月20日

発行者:八王子市総合政策部市史編さん室

〒193-0943 八王子市寺田町1455-3

TEL 042(666)1511 FAX 042(666)1512

調査・研究の成果を市民へ

—今秋、市民講座を開催！ 八王子学園都市大学へも講座を提供—

市史編さん事業では、八王子の歴史や自然に関するさまざまな資料を収集し、調査・研究を進めています。その中には、現在、そして今後のまちづくりを考えるうえで役に立つ情報が多く含まれています。これらを市民の皆さまと共有し、今後のまちづくりに活かしていくため、八王子学園都市大学『いちよう塾』に講座を提供しています。また、市職員



八王子市職員研修『大正時代の八王子—市制施行から「大八王子」建設へ—』
講師：近現代部会委員 梅田定宏氏（8月9日開催）



八王子学園都市大学 いちよう塾『八王子の民俗文化を探る』
講師：民俗部会長 小川直之氏（5月12日開催）

に事業の意義をより深く理解してもらうため、職員研修を開催しました。

さらに、『新八王子市史』資料編1 原始・古代の刊行に先立ち、調査・研究の成果の一部をいち早くお伝えするため、今秋、市民講座を生涯学習センターで開催いたします。詳しくは2頁に掲載しています。

Contents

調査・研究の成果を市民へ	1
市民講座「大地に刻まれた八王子の原始・古代」を開催します	2
『新八王子市史』の刊行開始によせて 市史編さん室顧問 村上 直	3
職員の異動	3
専門部会の主な活動（平成24年3月から8月まで）	4・5
平成23年度 刊行物のご案内	6
受贈図書・資料（平成24年2月16日から8月15日まで）	6・7
チャレンジインターンシップ体験記 笹川紗希	7
歴史の窓⑩ 水田のある風景 一田植えの調査から— 春日祐美	8

市民講座「大地に刻まれた八王子の原始・古代」を開催します

市史編さん室では、広く市民の皆さまに市史編さん事業について知っていただき、八王子の歴史に対する理解を深めていただくきっかけとなることを目的として、生涯学習センターとの共催で市民講座を開催しています。本年度は「大地に刻まれた八王子の原始・古代」と題し、下記のテーマで縄文時代から平安時代までの八王子の遺跡について学びます。

日 程：平成 24 年 10 月 26 日、11 月 2・9・16 日

全 4 回 (毎週金曜日)

時 間：午後 6 時 30 分～8 時 30 分

会 場：生涯学習センター (クリエイトホール)

5 階 ホール (八王子市東町 5-6)

受 講 料：無料

対 象：どなたでも

定 員：170 名 (応募者多数の場合は抽選)

申込方法：往復はがきに「原始・古代」と住所・氏名・電話番号、返信面の宛名を書いて、下記へお送りください。

〒193-0943 八王子市寺田町 1455-3

八王子市市史編さん室 **(10月5日必着)**



宇津木向原遺跡から出土した土器
(上：縄文時代／下：弥生時代)

日程	テーマ	内容	講師
第 1 回 10月26日	弥生時代の 八王子 「方形周溝墓発見 から48年、何が わかってきたか」	八王子市宇津木向原遺跡で方形周溝墓が発見されて、48年の月日がたちました。八王子市域の弥生時代研究から、何がわかってきたか、何が未だにわからないかを考えます。	市史編集専門部会原始・古代部会委員 都埋蔵文化財センター主任調査研究員 及川 良彦 氏
第 2 回 11月2日	縄文時代の 八王子 「ムラの景観と 住まい方」	八王子市域で数多く見いだされている中期の「環状集落跡」をとりあげ、縄文ムラの景観や居住の実態に、通説に懐疑的な立ち位置から実証的・考古学的にせまります。	市史編集専門部会原始・古代部会委員 国立ハンセン病資料館学芸課長 黒尾 和久 氏
第 3 回 11月9日	古墳時代の 八王子 「終末期古墳文化 の展開」	南武蔵・多摩川流域における古墳文化は、6世紀代までは下流域を中心として展開しました。しかし、7世紀代になると多摩地区が中心となり、八王子にも古墳が築造されるようになったことに注目します。	市史編集専門部会原始・古代部会副部長 立正大学文学部教授 池上 悟 氏
第 4 回 11月16日	古代の八王子 「国府・国分寺の 造営と八王子」	奈良時代、武蔵国の国府・国分寺という政治と宗教拠点の設置は、周辺地域にも大きな影響を与え、各種の開発をもたらしました。八王子市域を中心にその様相を探ります。	市史編集専門部会原始・古代部会委員 府中市郷土の森博物館学芸係長 深澤 靖幸 氏

『新八王子市史』の刊行開始によせて 市史編さん室顧問 村上 直

このたび『新八王子市史』編さん事業で、本編・資料編のうち「資料編5 近現代1」が刊行されたことは、まさに本格的なスタートであり、市民の皆さんにとってはもちろんのこと、市外在住の私たちにとっても大きな喜びである。それは、八王子市が江戸・東京の近郊に位置する関東における注目すべき都市だからである。私は太平洋戦争の末期、八王子が戦災を受ける以前から学徒勤労動員などで街なみを見てきたことから、また、戦後も7年間は多摩地域に在住したことから、八王子に多くの思い出がある。

私は地域の歴史を研究するようになり、甲斐の武田家臣団の動向に関心をもったが、昭和34年頃、大久保長安や関東十八代官、千人同心を調べるようになった。そのため、八王子の地元の研究者や市民の方々と親しく接するようになり、昭和38年12月には、当時の「八王子市史」下巻の編集委員として、短期間であったが、調査や研究に携わったこともある。当時の市史編さんの組織や規模は、現在とはかなり異なっていた。その頃は、八王子といえば滝山・八王子城や千人同心、八王子織物や自由民権運動への関心が強く、その後に高尾山や地域の寺院、宿場などについて、広い視野から各分野の研究が進められていったように思う。当時は『多摩文化』という地域誌を中心に研究が進められ、市民の方々と親しくなっていたが、それらについては、詳しくは『多摩のあゆみ』（たましん地域文化財団）の14・18・81号の対談・座談会や132号の特集号をご覧くださいと思っている。

私は、今まで山梨県及び関東を中心に、広範囲の自治体史の編さんに参画してきたが、その都度、八王子市やその地域の歴史の重要性を再認識することが多くあった。それだけに『新八王子市史』の編さん事業に期待するところが大きいのである。

今回の編さん事業は、戦後の復興を経て新たに収集された資料や民俗調査の成果に基づき、着実に進められているようである。

しかし、時代の転換期に当たり、各自治体も財政難など取りまく環境はきわめて厳しいといわれている。そのため最近の自治体史の編さんは、「近現代史」に限定する場合や既刊物の続編に類するものも多いと聞いている。わが「新八王子市史」編さんにおいては、従来の手法に捉われず、新たなモデルを提示していくという意気込みで、文化遺産の保存と活用を含め、未来に伝えていく八王子市の歩みをぜひとも示していただきたいと思っている。

(むらかみ ただし 法政大学名誉教授)

職員の異動

【新任等】 (平成24年4月1日付)	尾崎佐智子(主任)	税務部住民税課より
齋藤 和仁(主幹)	生涯学習スポーツ部主幹	
(こども科学館担当)兼こども科学館長より	【転出】 (平成24年4月1日付)	
秋山 和英(主任)	新井 雅人(主幹)	生涯学習スポーツ部
塚原 裕子(主事)		学習支援課長へ
	新規採用	
【退職】 (平成24年3月31日付)		
(平成24年4月13日付)	福田美和子(主任)	
秋山 和英(主査)	昇任	

専門部会の主な活動

原始・古代部会

引き続き「資料編1 原始・古代」刊行に向けての作業を進めています。資料編に掲載する写真は、膨大なスライド・ネガ資料から選別を行ったため、写真名に間違いがないか、反転がないかなど細かな確認を重ねてきました。出土文字資料集成や遺跡一覧など資料集ページの内容確認も行ってきました。現在、写真の掲載許可手続きや原稿・一覧の最終チェックを含め、刊行に向けて最後の詰めの編集作業を進めています。

また、26年度に刊行を予定している通史編の章構成についても検討を始めています。部会会議は3回開催しました。

中世部会

資料調査と並行して、25年度の「資料編2 中世」の刊行に向けた、掲載資料の検討なども進めています。中世の考古遺跡についても資料編で取り上げるため、執筆に向けた準備を始めました。8月には、川口地区での集中調査の事前準備と本調査を行いました。部会会議は3回開催しました。

資料調査は、引き続き市内および周辺の地域に残されている中世文書・資料の調査を行いました。資料編を充実させるために、可能な限り多くの関連文書や資料を見ていく方針です。なお、中世石塔調査は7月から9月下旬まで一時休止しました。お彼岸明けから再開の予定です。

近世部会

今年度の刊行を予定している「資料編3 近世1」に関する作業を進めています。「市と町」「宿場と街道」「領主と村」「村の様子」の4つのキーワードに関連する資料の調査・選択作業を行い、入稿原稿調製を進めています。

資料編の作業と並行して、引き続き資料の所在確認、整理を進め、マイクロフィルム等の複製物での収集、保存を行っています。短い期間での事業のため、資料が不十分な地域もあります。今後は、そうした地域への所在確認・調査を行い、八王子の歴史を多彩に示す資料の収集・保存を進めていく必要があります。部会会議は4回開催しました。

平成24年3月から8月まで

近現代部会

平成25年度刊行の、2冊目の資料編となる「資料編 6 近現代 2」に関する調査および章構成の検討、資料選択を進めています。平成23年度刊行の「資料編 5 近現代 1」は、主に旧役場文書などの公文書を中心に掲載したのに対し、「資料編 6 近現代 2」は八王子市内外の私文書も含めた資料編と考えています。

「資料編 6 近現代 2」の編さんを進めるにあたって、明治前期、明治中期から昭和初期（都市部）、明治中期から昭和初期（農村部）、戦中戦後復興期、現代の5つの時期区分ごとにチームを分け、定期的に研究会を開催しています。部会会議は3回開催しました。

民俗部会

今年度末に『新八王子市史民俗調査報告書 第2集 八王子市東部地域 由木の民俗』を刊行すべく、由木地区の調査を中心に行いました。現在、編集作業に入ったところです。由木地区のいくつかのお宅や寺社にお邪魔して、社会生活、生業、生活、信仰、年中行事、人生儀礼、芸能、口承文芸など多岐にわたって聞き取りしたほか、鑓水、越野に続いて大塚で合同調査を行うなど、多くの方々にご協力をいただきました。部会会議は2回開催しました。

今後は『由木の民俗』の編集作業を進めつつ、来年度に刊行予定の浅川地区の調査に入るため、同地区の実踏調査を行う予定です。

自然部会

来年度予定している『新八王子市史 自然編』の刊行に向けて、いよいよ原稿の執筆を開始しました。執筆者は全部で47名に上るため（平成24年8月現在）、執筆開始に先駆けて執筆者全員が集まる「全体会議」を4月に開催し、一冊の本にまとめていくための話し合いをしました。基本的には、これまで2年間に行った市内全域での調査結果をもとに執筆しますが、動植物の種類によっては現在も調査を続行しているものもあります。

全体会議1回、部会会議1回、企画会議2回を開催しました。

平成23年度 刊行物のご案内

むらめいさいちようしゅうせい

『村明細帳集成』(八王子市史叢書1)



A5判
454頁
1000円

『八王子市史研究』第2号

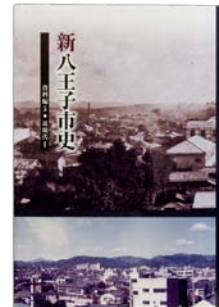


A5判
187頁
500円

『八王子市西部地域 恩方の民俗』
(新八王子市史民俗調査報告書 第1集)

A4判
279頁
1000円

『新八王子市史』資料編5 近現代1



A5判
978頁
3000円

☆購入の方法(郵送の場合：市史編さん室のみ取扱い) ご不明の点は、お気軽にお問い合わせください。
希望する書名と冊数、送付先、お名前、電話番号を明記し、書籍代金の総額(郵便局で購入した「定額小為替」か、
現金の場合には現金書留で)と送料(図書を入れた荷物の重さで送料が決まります)の切手を同封し、
〒193-0943 八王子市寺田町1455-3 八王子市市史編さん室 までお送りください。

☆販売場所 八王子市役所(1階 市政資料室)〈元本郷町〉 八王子市郷土資料館〈上野町〉
八王子駅南口総合事務所(『村明細帳集成』を除く)〈JR八王子駅〉 八王子市市史編さん室〈寺田町〉
恩方事務所(『恩方の民俗』のみ)〈下恩方町〉

平成24年度

刊行予定
の本

- | | |
|--|--|
| 1『新八王子市史』資料編1 原始・古代 A4判 | 4『八王子市東部地域 由木の民俗』
(新八王子市史民俗調査報告書 第2集) A4判 |
| 2『新八王子市史』資料編3 近世1 A5判 | |
| 3『聞き書きでつづる八王子織物(仮題)』
(八王子市史叢書2) A5判 | 5『八王子市史研究』第3号 A5判 |

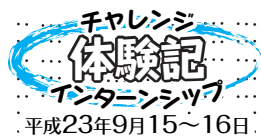
受贈図書・資料

平成24年2月16日から8月15日まで

多くの方々から、図書や資料をご寄贈いただきました。御芳名を記し、謝意を表します。

- 【個人】 相原悦夫 新井雅人 石井貞行 大野聖二 小川洸太郎 及川良彦 梯弘人 加藤憲司 川村文吾
木内基容子 木下治夫 黒住耐二 小泉茂 佐々木藏之助 佐藤治朗 佐藤秀文 佐藤広 澤井榮
繁田真由美 須賀一雄 菅井憲一 杉山弘 関和彦 中村元 西岡芳文 長谷部晃一 馬場喜信
菱山忠三郎 深澤靖幸 藤田覚 本間岳人 峰岸純夫 吉山寛 (敬称略・50音順)
- 【機関】 たましん歴史・美術館歴史資料室 札幌市総務局行政部文化資料室 広島県立文書館 三鷹市教育委
員会生涯学習課 伊勢市総務部総務課 東北大学東北アジア研究センター 可児郷土歴史館 沼津市
教育委員会 寒川文書館 杏林大学外国語学部 福岡市教育委員会総合図書館文学・文書課 横浜市
史資料室 刈谷市教育委員会生涯学習部文化振興課 所沢市教育委員会教育総務部生涯学習推進セン
ター 相模原市立博物館 松江市教育委員会文化財課 茅ヶ崎市文化生涯学習部文化生涯学習課 町
田市立自由民権資料館 昭和館 大和市文化スポーツ部文化振興課 熊谷市教育委員会社会教育課

野田市総務部 上田市教育委員会文化振興課 八戸市立図書館 石川町教育委員会町史編纂室 青森県総務部総務課 伊勢市総務部総務課 福島県歴史資料館 長崎市総務局企画財政部市史編さん室 豊島区立郷土資料館 青森県環境生活部県民生活文化課 小山市教育委員会文化振興課 小平市中央図書館 長野市公文書館 東京都公文書館 古河市教育委員会文化課 関市教育委員会文化課 八王子市郷土資料館 南山大学資料室 柏市史編さん委員会 逋信総合博物館 東京都埋蔵文化財センター 館林市教育委員会文化振興課 全国歴史資料保存利用機関連絡協議会広報・広聴委員会 藤沢市文書館 永林寺 霞神社奉賛会 天応院 (順不同)



より知ることのできた八王子

日本大学 文理学部 史学科 3年 笹川 紗希



今回のチャレンジインターンシップには、市役所がどのような雰囲気なのかが知りたいと思い参加しました。大学で学んでいる歴史の知識や、司書や学芸員の知識が、どの程度定着しているかを知りたいと思い、市史編さん室を選びました。

私は今、考古学を学んでいます。恥ずかしいことに自分が住んでいる八王子に縄文・弥生時代の遺跡がいくつもあり発掘調査が行われていたことを、大学に進学し考古学を専攻するようになってから知りました。どの地域にもそれぞれの歴史があることはわかっていますが、子

どものころから住み慣れた八王子に古い歴史があるとは想像できませんでした。そのため、今回のインターンシップでは、八王子の歴史を知り、それを保存して文章として市民に伝える仕事に触れるという貴重な体験ができました。

今回、寄贈された古文書の封筒詰め資料整理と、旧市民会館の設計図や照明関係の資料を搬入するという作業を実際に体験しました。資料整理では、普段なかなか見ることのできない古い自治会の名簿や日記などといった古文書の整理を体験させていただきました。これらの古文書は、市に寄贈された資料ということで、貴重な資料を寄贈してもらえるということは提供者と学芸員との間に信頼関係がないとできないことだと感じました。こうした資料収集はただ闇雲に集めるのではなく、資料をもっている方と学芸員の人と人のつながりが大切だということを教えてもらいました。また郷土資料館などの施設見学では、翌日から始まる特別展の展示準備の様子を見学し学芸員の方とお話しをする機会があり、そこでも人とのつながりが大切だということを知りました。その他にも、川口図書館では閉架書庫の中を見学させてもらい、書庫の状態や予算の関係で新聞などのマイクロフィルム化がなかなかできないという現状を聞かせていただきました。

旧市民会館での資料搬入では、設計図や照明関係の資料は市史編さんには直接関係する資料ではなかったのですが、旧市民会館は取り壊されるとのことで、いつかはその場所に市民会館があったことも忘れられてしまうと思ったら、設計図などの資料は今必要とされなくても10年後20年後には必要な資料となるのだと思いました。そのため必要な資料とそうではない資料を区別するのは難しいということを実感しました。

今回のチャレンジインターンシップに参加してみて、普段は見ることのできない資料を薫蒸するテントを見せていただくなど、とても貴重な体験をさせていただきました。このインターンシップで学校の授業で習った通りのことが必ず実現できるわけではないということを実感しました。市史編さん室での体験はどれも貴重で、知らないことも多くとても勉強になりました。市史編さん室の職員、調査員の皆様、お忙しい中ご指導いただきありがとうございました。(ささがわ さき)

歴史の窓⑩

水田のある風景 —田植えの調査から—

市史編さん専門員 春日 祐美



田植えの様子

「暑いからこれかぶって。長靴もあるから履き替えてね」

今年5月、由木・東中野のあるお宅に田植えの調査に入った。まだ稲を植えていない水面にはたくさんのタニシが這い、ヤゴやアメンボも悠々と泳いでいる。田植えの様子を撮影させてもらおうとしたとき、奥様が声をかけてくれた。

このお宅は、無農薬の上、家族総出で苗を手植えしている。ドブツタと言われる湿田で、ひざ近くまで沈む所もあるのでなかなか大変な作業だ。「長靴が脱げる!」「足が抜けない!」という悲鳴と、明るい笑い声が田に響いていた。

このような様子を、農村に育った人は「懐かしい」と思うのではないだろうか。手植えする家は今ではほとんど見られなくなったと言っても過言ではないだろう。しかし、もっとむかしの八王子では、違う風景が広がっていた。

古くは苗を田に植えるのではなく、直播き栽培「摘み田」が一般的な農法として行われていたのである。「摘み田」という言い方は、東京都・神奈川県・埼玉県などで伝承され、東浅川町・石川家の享保5年(1720)からの農業日誌である『石川日記』には「田つミ」として散見する。当時は直播きするのが一般的で、幕末に植田を併用し始め、その後明治30年代から植田が優勢になり、明治時代末期には植田が一般的になったのだという。苗を手植えするようになったのは、長い歴史から言えば意外に最近のことなのだ。

また、今回の田植え体験で非常に苦勞したドブツタだが、その中でも特に深いドブツタは大人のヘソまで埋まることもあったと聞いた。そのような底なしの田んぼでは、松や杉の丸太を埋め、その上に乗って田植えをしたそうだ。後には、排水をよくするため、溝を掘ってその溝に落葉樹の枝と松葉を詰め、その端に土管を立てて埋めて暗渠排水を行うなど工夫して稲作をしたという。そのほか、自力で数年かけて耕地整理をし、収益増加を目指したという話も耳にした。

恩方地区では、山間部で水田を作るには耕作地が少なく困難なため、かつてはほとんど水田が見られなかったという。畑でオカボ(陸稻)を作る程度だったが、昭和20年代になって増産を目指すために相当の苦勞をして畑に水を引いて陸田を開いたと言われている。直播きから手植えへ、ドブツタが暗渠排水により埋まらず田植えできるようになる、蛇行していた畝がまっすぐになり面積が広がる、陸田が増える一。ムラの景観は、大きく変わってきた。

私たち日本人の主食を支える稲作は、先代の人々が苦勞と工夫を重ねて引き継いできた。そのときそのときに一番良い方法を編み出し、変化させながら続いてきたのだ。そんな水田そのものを、今ではほとんど目にすることがなくなった。青森に住んでいる私の祖父は88歳になるが、寄る年波に勝てず今年から稲作をやめた。毎日休みなく朝から晩まで、祖母とともに田と畑で生きてきた祖父が稲作をやめた心境は、いかばかりかと思う。

しかし一方、多摩ニュータウンに隣接する堀之内では、他の都市から引っ越してきた方が中心となって設立した里山農業クラブという団体が田を作り、稲作などを通して地元の人たちと交流しながら里山の保全に努めている。地元の小学生らに田植えを教えており、児童らが泥だらけになりながら真剣な表情で苗を植える姿は、地元の伝統文化を継承して頼もしい限りだ。ここから新しい時代の稲作の方法や意義が生まれるのではないかとと思う。変化は悪いことばかりではないと信じ、この変化を見守って記録していきたい—などと楽観的に考えている。

(かすが ゆみ)

【参考文献】小川直之『摘田稲作の民俗学的研究』(岩田書院、1995年)／八王子市市史編集専門部会民俗部会『新八王子市史民俗調査報告書 第1集 八王子市西部地域 恩方の民俗』(八王子市、2012年)